ひと

軍事政権下の人々
ミャンマーを撮る

世界の構造に目を向け 日本人の枠を超えたい

宇田（うだ）有三（ゆうぞう）さん

1963年神戸市生まれ。92年毎日フォトコンテスト文部大臣奨励賞、02年日本ジャーナリスト会議黒田清新人賞など受賞。

フォトジャーナリストとして、軍事政権下のミャンマーを93年から撮り続けている。10度目の訪問では、今年9月まで約1年をかけ、ほぼ全土を回った。タイ国境からも潜入し、自治を求め武装闘争を続けるカレン民族の前線や難民キャンプを取材してきた。

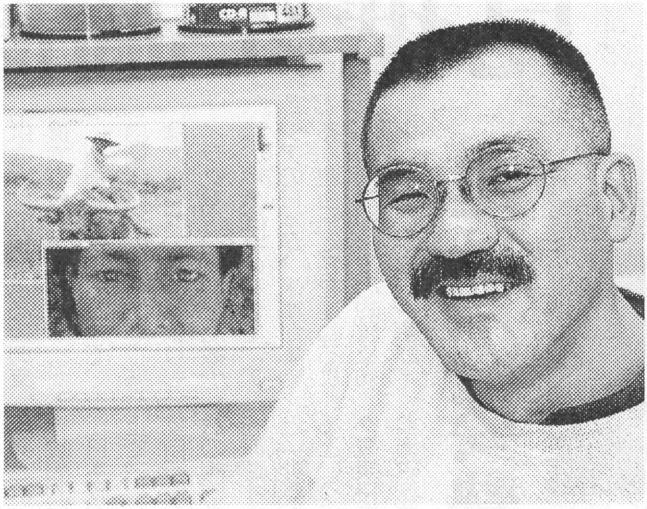
民主化運動の指導者アウンサンスーチーさんの動静だけが注目される。だが、なぜ軍政が続き、対峙（たいじ）する彼女が頑張れるのか。ビルマ語を学び、当局の監視をくぐって触れた庶民の日常に、答えを見つけた。

「都市でも農村でも、強くしたたかに暮らす人々の希望が、彼女だった」。日々働き、ほほ笑みを絶やさぬ人たちの素顔をとらえた1万7500枚から800枚を選び、報告会を重ねてきた。

中学校の英語教師を27歳で辞め、米国でフォトジャーナリズムを学んだ。92年、和平交渉が大詰めを迎えていたエルサルバドル取材を皮切りに、軍政による抑圧、貧困や先住民族を最前線で撮り続ける。

中米と東南アジアの6カ国で、ごみ捨て場で生きる人々も追った。太平洋を挟み、境遇は同じだった。農村に土地がなく、都市に出ても仕事がない。「悲惨さより、そんな構造に目を向けて」と、写真で訴える。

神戸を拠点に、国内外に発信する。今回もミャンマー国内の難民の姿を、英字紙バンコク・ポストの1面で発表。自らのホームページには海外からのアクセスも多い。

「日本人の枠を超える」が志であり、メッセージだ。

文・太田裕之
写真・関口　純